

## 第63号

令和4年  
5月1日

題字  
植木 満  
初代東進会会長



## 発行所

土浦一高東進会

〔茨城県立土浦一高  
進修同窓会東京支部〕

## 発行人

東進会会長 飯塚 哲哉

事務局 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館6階

宮崎法律事務所 気付 東進会事務局

TEL (FAX) 03-5421-5321

E-mail: toshinkaisecretary@gmail.com ホームページ <https://to-shin-kai.jimdo.com>

花園(ひたち海浜公園)

提供 青木 功(フォトグラファー 昭和50年卒)

■ 『山陰での十年を振り返る』  
横田 孝義(昭和50年卒)

■ 『一高華道部・高校生花いけバトル  
全国優勝の軌跡』  
土浦第一高校・付属中学校校長  
中澤 斉(昭和56年卒)

■ リレー放談 第13回  
『若い人の将来と夢、幸せとはなんだろう』  
木内 里美(昭和40年卒)

■ 第22回アカンサスクラブ講演録  
『今さら聞けない人事制度と  
コンサルティングの仕事』  
吉岡 利之(平成5年卒)

■ 第23回アカンサスクラブ講演録  
『優れた人材の力を得て、中小企業を強く  
する地域経済・日本経済復興への道』  
宮本 修(平成9年卒)

■ **令和4年度通常総会はオンライン会議**



## 『山陰での十年を振り返る』

横田孝義(昭和50年卒)



## 昔話・土浦の記憶

気が付けばこの数年は将来を夢見る時間よりも、過去を振り返る時間の方が増えてきてしまったように思います。昭和31年生まれで65歳、高齢者の仲間入りをしたという事もあり、今回の寄稿を機に今までの自分の辿った道を振り返ろうとしました。が、皆様の御参考になるのか全く自信はありませんので、そこはご容赦頂きたいと思えます。

私が土浦一高に入学したのは昭和47年、今から50年前に遡ります。生まれ育った土浦市は東京から60km程度の距離なのですが、当時東京は遙か彼方の世界に思えました。子供のころの行動範囲はとても狭いもので、自転車で行ける距離を基準にしていた様に思います。物心ついた時には巨人、大鵬、卵焼きを信奉する子供になっていました。小学校に入っていた頃の土浦は終戦の余韻がまだ残っていたようで、小学校(土浦第二小学校)の付近には防空壕の跡があり、白い服を着た傷痍軍人の方々を見かけることもありました。テレビ

や少年向け漫画雑誌では、先の大戦を扱ったものがいくつもありません。反戦色というよりも哀愁が漂っていた記憶があります。子供ですから当時はゼロ戦(海軍零式艦上戦闘機)や隼(陸軍一式戦闘機)のいわゆるカッコよさに憧れ、さらには、高度成長期の中、鉄腕アトムやサンダーバードにも熱中しました。

中学生の時のアポロ11号の明け方の月面着陸も影響大でした。こういう少年期を過ごした影響で、漠然と将来は航空宇宙に関わる仕事に就きたいなどと考えていました。

## 大学生の頃

大学は航空宇宙とはあまり関係ない東工大の電気系の学科に入りましたが、都会出身の同級生となじむのにも時間がかかり、東京や横浜出身の同級生の会話になかなか入っていきませんでした。田舎者の意地とでも言いましょうか、彼らに負けたくないという気持ちもあってか、そこそこの学業も頑張った記憶があります。学部での4年を終え、コンピュータやデジタル信号処理の分野に関心が高くなっていました。

研究室の教授の勧めで、博士後期課程まで進ませてもらい、途中くじけそうになりつつも何とか学術誌論文が三篇掲載され、3年で工学博士の学位を取得できました。普通ならそのまま学究の世界に身を置きたくなるものですが、このまま研究で一生やっていくことが不安でしたし、

一足早く社会人になっていた同級生達と同じように、社会に出て仕事したい気持ちが強く、地元で親近感を感じていた日立製作所に入社しました。

## 会社員時代

日立製作所では、日立市の大みか町にある日立研究所で23年間、最後の2年間は品川の事業部に向向で、勤務する事になるのですが、その間、北米生活を含め、色々な事を経験させていただきました。1988年の秋、帰国してすぐに、道路交通システムの研究開発を任せられるようになりました。この仕事は会社にとって新規ビジネスを立ち上げる、という役目でしたので、比較的自由に仕事をさせてもらいました。幸いに優秀な部下にも恵まれて、研究成果も積み上がっていき、社内でも多少は大きな顔が出来るようになっていきました。2008年には、事業部に向向して、某社の純正カーナビの製造に携わることになりました。

その後、2009年にリーマンショックが到来。経費削減策で奔走する日々がやってきました。その時に京都大学から阪神高速道路の寄附講座の教授のお誘いがありました。数日考えた末、日立製作所を退社して3年間の有期雇用の教授になることにしました。

このようにして、生まれて初めての関西での単身赴任生活が始まりました。アカデミックな世界は、会社

生活に比べればとても自由で魅力的ですが、研究成果が出ない場合の焦りは大変なものがあります。はたして順調にやっつけていけるか、不安を抱えた52歳での再出発でした。

## 関西、山陰への転職を機に嫌いなものが好きに…マラソンと魚介類

ここで話は変わります。関西という全くの新天地では知り合いが居ないため、京都のランニングクラブに入ってもらうことになりました。京都大学の3年間を終えて、公募に応募して、鳥取大学の工学部教授に採用された後は、近畿、中国地方のマラソン大会に数多く参加しました。

2009年11月に、淀川沿いの10kmのレースに参加したのが最初で、13年間で大きさまさま150レース程に参加しました。もともと走るのは苦手なほうで、小中学校の持久走大会は雨で中止になればよい、と真剣に願っていました。まずは、初のフルマラソンとして、2012年4月のかすみがうらマラソンに参加。制限時間の6時間にギリギリ間に合うタイムで完走しました。これをきっかけに、現在までフルマラソンを60回以上完走しました。

1番速かった2012年の鳥取マラソンで4時間14分。フルマラソンが完走できることを知ると、ウルトラマラソンにも興味が湧き、島根県の隠岐の島ウルトラマラソンの50kmの部に参加するようになりました。この大会には、今までに6回完走し





て、あと一回完走すれば完走の記念メダルが7つそろって、レインボーメダル達成という事で表彰されるのです。しかし、あと少しというところでは新型コロナウイルスが蔓延。隠岐の島ウルトラマラソンは、2年続けて中止になってしま



ました。その間、自身は歳をとるとともに運動不足になり、完走出来るか危うくなっています。ウルトラマラソンはともかく、フルマラソンの42.195kmという距離も以前は果てしなく長い距離だと思っていました。何度か完走するようにになると、自分なりの完走の定石みたいな物が出来てきました。

1キロを6分弱のペースで刻んでハーフマラソンの距離21.0975kmを2時間一桁分で通過して、30kmまでには大崩れしないで、3時間半で通過出来れば、4時間台のフィニ

ッシュは確実に出来る手応えが掴めました。未だに、4時間を切る(サブ4)は達成していませんが、制限時間の6時間は気にしなくなりました。

一方、コース自体に標高差の規定がないウルトラマラソンでは、山あり谷ありが普通です。例えば、隠岐の島ウルトラマラソンでは50kmの制限時間が8時間、100kmの制限時間が14時間30分となっています。100kmのレースには京丹後のレースに5回出ていますが、一度も完走出来ていません。こちらは制限時間14時間、1kmを8分24秒のペースで走ればよいので、楽勝の様なのですが、50kmを過ぎたあたりから足が動かなくなり、そこから先は、どう頑張っても1km10分ペースがやっと。関門で引っかけ、そこで係員による強制收容となります。果たして、これが健康に良い事なのか、疑問の余地はありますが、いつかまた挑戦したいと思っています。隠岐の島は、鳥取の境港から高速船で1時間半ほどで着く人口1万5千500人ほど、メインの丸い島は島後(どうご)と呼ばれています。周囲211km、半径30kmくらいの丸い島です。

山陰の食べ物といえば、海産物、特にカニは有名です。ズワイガニをこの地方ではオスは松葉ガニ、メスは親ガニと呼んでいます。魚は元々苦手でしたが、こちらに来て食べるようになりました。のどぐろ、エテカレイなどが美味しいです。夏は岩



牡蠣。牡蠣は冬の食べ物と思っただけですが、岩牡蠣は初夏が旬です。隠岐の島特有の食べ物と言えば、隠岐蕎麦です。10割蕎麦で3センチくらいに細切りになった蕎麦と、サバとあご(トビウオ)をふんだんに使った蕎麦で、最初は程なく癖になります。柚子と白ゴマ、刻み葱も入っています。蕎麦の風味を楽しむといった風情はありませんが、漁師の知恵から生まれた蕎麦なのかもしれません。

### 大学教員を振り返って

京都大学での生活は研究主体の日々でしたが、鳥取大学では授業も年間6科目ほど担当し、学科長、専攻長、就職担当、学務担当、入試担当などの仕事も容赦なく回って来ました。会社と違って、利益を追求しないで自分の興味で研究を行える立場はとても魅力的です。ただし、下手をすれば何の役にも立たない趣味の研究に陥ってしまいます。人類の将来にほんの少しでも影響を与えるような研究でないといけない、と自分を律する必要がある。

人生にはいくつかのパラレルワールドがあるような気がします。会社に入らずにそのままアカデミックな世界に進んでいたら、もつと研究成

果は増えていたかも知れませんが、今の家族とは巡り合っていないので、どんな人生になっていたか、想像もつきません。振り返れば、色々な転機がありました。毎回、少しずつ危ない橋を渡って来たのかも知れませんが、関西や山陰とも縁が無く、65歳を迎えていた選択肢もあつたと思います。

それぞれの判断は決して確固たるものではなく、偶然の織りなした結果でもあります。不思議なものです。ここまで大過なく過ごせたのも家族や友人、知り合ったみなさん、恩師のおかげです。今後も感謝の気持ちを忘れずに精進したいと思っています。

鳥取大学では、10年間で延べ1500人以上の学生に授業で接し、研究室では延べ100人以上の卒業論文、修士論文、博士論文の指導をする機会に恵まれました。多少なりとも彼らのこれからのプラスに影響できたらと思います。また、2019年にはITS(Intelligent Transport Systems)の第26回世界会議で日本人唯一の最優秀論文表彰を受けました。このような経験は、会社員を続けていては多分得られなかったことです。諸先輩、御同輩、若い方々には私などよりもっと大きく羽ばたいていらつしやる方もおられる中、拙稿を最後まで読んでいただきまして、感謝いたします。母校土浦一高の益々の御発展をお祈り致し、感謝と共に拙文のペンを擱きます。



『一高華道部・高校生花いけバトル  
全国優勝の軌跡』  
土浦第一高校・付属中学校校長  
中澤 斉(昭和56年卒)

「花いけバトル」をご存じでしょうか。「花いけバトル」は、二人一組でチームを作り、ステージに用意された花材を使って、5分間で生け、その所作や作品の美しさなどを競うという華道を現代風にアレンジした競技です。二人が順番に対決するので、選手をそれぞれ「先鋒」「次鋒」と呼び、審査員の合計得点で勝敗を決します。

土浦一高華道部のチーム「雪月風花」が、「全国高校生花いけバトル」に挑戦し、全国大会で優勝を成し遂げるまでの軌跡をご紹介します。

一高の華道部は、三年生が4人、一年生が5人と少人数ながら一高祭に作品展示を行うなど地道な活動を続けてきました。一年生は全員が高校に入ってから華道を始めた初心者です。三年生引退後の令和3年8月、一年生の新キャプテンが顧問に「花いけバトルに出てみたいですよ」と相談したのが始まりでした。その後、11月に行われる県大会に向けて、実際に花を生けたり、動画で過去の大会の様子を学んだりしながら練習を重ねました。大会では大きな花器を使うことが多いのですが、学校にはないのでバケツに生けるなどの工夫をしながら、池坊華掌である顧問の指

導の元、めきめき力をつけました。

11月の県大会は、21チームが参加して、県民文化センター大ホールで開催されました。「雪月風花」は、努力家の元島さんと常に冷静な関さんのペアです。予選、準決勝を順調に勝ち上がって迎えた決勝では、先鋒の元島さんが生けた作品を、次鋒の関さんが倒してしまおうというアクションがありましたが、関さんが自分の作品を4分で仕上げ、残り1分で元島さんの作品を直すという素晴らしいリカバリーを見せ、見事優勝することができました。この大会を目指して3年間頑張ってきたチームもある中、無欲の一年生チームが快挙を成し遂げ、同時に、全国大会への切符を手にするになりました。

この県大会優勝が報道されると、全国大会に向けての練習に役立ててほしいと、地元のJA水郷つくばからは400本以上の花材を提供して頂き、遠くJA常陸奥久慈からも名産品である枝物を提供して頂くなど、多方面からのご支援があり、今まで以上に実践的な練習を2ヶ月間行うことができました。この間、練習成果である作品は、昇降口や校舎各階の廊下、職員室、事務室などに飾られ、とても潤いのある空間となりました。更には、12月に茨城県庁を訪れ、県庁内に飾るお正月用の花を生けるといふ貴重な経験もさせていただきました。そして1月、いよいよ全国大会で

す。全国大会は香川県高松市で開催されました。初日の予選ラウンド、「雪月風花」は「花いけを楽しむ」をモットーに落ち着いて作品を仕上げ、全体の3位で予選を通過しました。上位8校が進んだ2日目の準々決勝は東京都の正則学園高校に勝利。続く準決勝は予選1位の香川県飯山高校に勝利して決勝進出。決勝は、全国大会優勝経験のある大阪府の相愛高校チームとの対戦です。先鋒の元島さんは、竹の先端に花を挿し、竹を立てようとしたがうまくいきません。終了間際まで諦めず挑戦し、見事に竹が立ったときには、会場から安堵と感嘆の拍手が沸き起こりました。次鋒の関さんも先鋒の作品と呼応するように竹を使い、二つ

で一つの作品のように感じられる一体感のある作品となりました。二人が力を出し切り、534点対527点という僅差で接戦を制した「雪月風花」が見事に初出場初優勝という偉業を成し遂げました。優勝後のインタビューで、元島さんは「自分に勝つ強い気持ちで臨んだ」と振り返り、関さんは「次回大会は新たなアイデアを取り入れて臨みたい」と早くも令和4年度の大会に向けて抱負を語りました。

帰校後は、新聞各社やラジオ局、テレビ局、出版社などからの取材依頼、県知事及び県教育長への表敬訪問、JAへのお礼訪問など、忙しい日々となりました。中でも、知事と

の懇談では、関さんが「全国優勝できたのは、自分たちを支えてくれた多くの方々の協力があったからで、人のつながりに感謝しています」と話し、知事からは、「これからの時代を心豊かに生きてもらいたい」と激励の言葉をいただきました。

本校では、「二高スタイル」の精神が息づき、生徒達は、勉学はもちろん部活動にも精一杯取り組んでいます。どの部も頑張っていますが、今回華道部が全国大会で優勝したことは、他の生徒、他の部活にとっても大いに刺激になり、「自分たちも更に頑張ろう」という思いを強くしたのではないかと感じます。また、現在、コロナ禍により様々な活動が制限され、気分的に減入りがちでしたが、今回の華道部の活躍は、学校全体を明るくするニュースでした。更には、土浦一高生が、いろいろな分野において高いレベルでやり遂げる力を持ち合わせていることを、校外多くの皆さんに再認識していただけたのではないかと華道部の生徒達に深く感謝しております。



全国大会優勝の作品とチーム「雪月風花」



『若い人の将来と夢、  
幸せとはなんだろう?』  
木内 里美 (昭和40年卒)

人間社会は、いつも変化している

2019年12月に中国の武漢市で初めての新型コロナウイルスの感染者が報告されてから、もはや3年目になります。パンデミックと呼ばれる世界的な流行が、これほど長期に亘ると誰が予想できたでしょうか?

まだ先が見えてきたわけではないですが、ウイルスが変異を繰り返して弱毒化していく傾向が見られることから、多くの国はコロナウイルスの存在を前提にしたニューノーマルな社会活動を始めています。それは、もうコロナ以前の社会に戻ることはないけれど、新しい日常で経済活動を始めるということなのです。

コロナウイルスの感染力によって非接触・非対面の生活が続いたために、在宅勤務でのテレワークやオンライン会議が当たり前になりました。コミュニケーションの質の低下やモチベーションコントロールの困難さはあっても、混雑する電車での通勤も必要なく、家族との時間も十分取れる生活から週5日フルタイム出勤の生活には戻りたくないし、もう戻れないでしょう。

また、2022年2月24日にはロシアがウクライナへの本格的な侵攻を開始しました。21世紀になってもアフリカの内戦やイラク戦争、アフ

ガニスタン紛争など局所的な争いごとが絶えることはありませんが、今回の侵攻はロシアの一方的な暴挙であって、国際法上も許されるものではありません。攻撃は市街地に及び、

大量の市民が国外に避難したり殺害されたりしているのです。1ヶ月が過ぎても、国際的にはロシアに対する経済制裁を課す程度のことしかできず、国際機関は全く無力であることをまざまざと見せつけられました。

3月23日にはウクライナのゼレンスキー大統領が日本の国会でオンライン演説を行い、日本への感謝と平和への希求を述べました。その全文は翻訳されて衆議院のホームページに公開されています。誰もが自由と平和を求めながら、このようなことが起こってしまうのが人間社会の現実なのです。

ウクライナ侵攻の影響は局所で留まることはなく、これから起こる世界経済への影響は計り知れません。日本も物資や流通や価格高騰の影響が如実に現れることでしょう。どのような時代でも人間社会はいつか変化していき、生きるためにはその変化に柔軟に対応することが求められています。

衰退する日本でどう生きていくか

日本の少子高齢化は改善の術もなく、長期には経済が衰退していくことが避けられません。さらに、日本生産性本部が公表した2021年における労働生産性の国際比較によれば、

日本の一人当たりの労働生産性はOECD38カ国中28位で、改善も見られないまま20年以上低迷が続いています。

地方における衰退はさらに著しく、昨年から新たに「デジタル田園都市国家構想」というデジタルを活用した地方創生策が打ち出されていますが、従来の枠組みである交付金給付モデルを超えられるかどうかは、これからの運用と自治体の取り組み次第です。

いかにも暗い話題が多い日本ですが、悲観することはありません。日本の良いところ、優れたところはたくさんあります。風光明媚な国土は、世界的に人気が高まる日本酒を生み出す上質の水とその水を作り出す森林に恵まれ、森林は無尽蔵のエネルギー源でもあるのです。食文化の豊かさや他には例を見ず、伝統的な発酵文化は国民の健康に寄与しています。資本主義の豊かさだけが幸福につながるわけではありません。経済的には貧しくとも幸福に暮らす国は沢山あります。地産地消の里山資本主義は、金銭的な豊かさとは異なる豊かさを創り出すことができます。

人間万事塞翁が馬の例えで、コロナパンデミックが肩を押した働き方の多様化や価値観の変化は、若い人たちにとって朗報となるかもしれせん。

これからの夢と幸せ  
これからの社会は、Z世代と呼ば

れる若い人たちが社会を創り上げていくこととなります。Z世代はスマホが当たり前のデジタル・ネイティブで、SNSを活用したオープンなコミュニケーションも得意です。デジタル技術の発展はメタバースと呼ばれる仮想空間を作りあげ、NFT(非代替性トークン)と呼ばれる技術を使って唯一無二の新しい価値や仮想通貨によるビジネスを生み出しました。仮想空間が人類に何をもたらすのか、いずれZ世代が理想的なデジタル社会を創出していくことでしょう。



社名をFacebookからMetaに替えたMeta社が考える仮想空間メタバースのイメージ

(Meta社のHorizon Workroomsの紹介サイトからの転載)  
<https://about.fb.com/news/2021/08/introducing-horizon-workrooms-remote-collaboration-reimagined/>

Z世代は多様な価値観を持っていることから、ダイバーシティやインクルーシブな社会を求めていくでしょう。「個」を大切にしている傾向があり、日本社会に根付いて息苦しさを感ぜさせる同調圧力も排除していくに違



いありません。

従来日本の教育は知識偏重、同質育成でしたが、欧米教育のような個性を尊重して自立・自律を促し、コンピテンシーを高める傾向が出てきています。またエモーショナルな要素やアート感覚など感性を高めることも尊重されるようになりました。

Z世代の次の世代はα世代と言うようですが、α世代が社会を形成する頃には、本当の幸せが見えてくるような気がします。

次号のリレー放談は、同期で女流書道家の梅澤熙子さんをお願いします。どんな話をお聞かせ願えるか期待しています。

## 第22回 アカサスクラブ講義録 『今さら聞けない人事制度と コンサルティンクの仕事』

コンサルティンクの仕事』  
吉岡 利之(平成5年卒)



この度、講演の機会をいただきました。平成5年卒の吉岡利之と申しました。新卒の時には法律関連の出版社に入社しましたが、仕事の合間に受検した資格取得を機にコンサルタントに転身したのが16年前になります。

それ以来、何度か会社は変わりましたが、一貫して人事制度を構築支援するコンサルティンクという業務に従事しています。今回は、コンサルティンクの仕事内容に触れつつ、人事制度関連で近年注目されているトピックスについてお話していきたいと思えます。

### 【コンサルティンクの仕事】

コンサルティンクの仕事といえば、かつては長時間労働、労働集約型、アプ・オア・アウト(出世するか、退職するか)などのキツイ仕事で語られることが多かったように思います。実際に私がコンサルタントになったときには時間管理や教育などにあつてないような状態でした。近年は働き方改革の成果もあり労働環境は整備され、東大生の就職希望ランキング上位にコンサルティンク会社が挙がるなど、世間からのイメージも大きく変わったように思います。

しかしながら、人事制度の構築支援とはどのようなことをしているかわからないとよく言われます。「人事領域は一般的に、就職支援をする「人材紹介」、教育研修などを行う「人材開発」、労働・給与に関する相談や手続きを行う「労務」、そして「人事制度」に大別されます。人事制度とは一言でいうと、「労務の提供と処遇に関する社員と会社間のルール」のことを指します。主に社員の能力・役割やキャリアなどを区分する「等級

制度」、給与・賞与や退職金の支払方法を定める「報酬制度」、社員に求める能力・行動を示し育成につなげていく「評価制度」に大別されます。ベンチャーなど社歴の浅い会社はこのような制度がない場合も多いので、事業の継続・成長を支えるような制度を、社歴の長い会社は長年の運用で蓄積された課題を明らかにして、その解決につながるような制度を構築・改定する支援(アドバイス・提案・資料作成・説明等)するのが人事制度分野のコンサルティンクの仕事となります。

### 【人事制度関連で近年注目されているトピックス】

コンサルティンクの現場では最近相談が多いのが、A・会社間の合併に対応した人事制度の共通化、B・株式上場に対応する制度の構築、C・給与カーブの見直し(中高年の給与抑制・若手の引き上げが多い)、D・高齢者雇用安定法に準拠した雇用延長の4点です。AとBは会社の成長に向けた対応、C・Dは急速に進む少子高齢化、労働人口の減少への対応とも言えます。

一方で、世間で着目されているトピックスは以下の4点と感じます。一つ一つについて簡単に説明していきます。

①給与格差の問題…新聞やテレビ、ネットなどで毎日のように目にするのが給与格差の問題です。例えば、

賃金構造基本統計調査という厚生労働省の統計を見ると分かりやすいのですが、男性・女性では明確な差があります。また、1995年と2019年を比較すると特に男性は明らかに給与が伸びておらず、世代間でギャップがあることが確認できます。このほか統計上で、産業による格差、企業規模による格差、正社員と正社員以外の格差が確認できます。このため、格差はいろんな切り口で発生しているといえます。

②賃上げ…岸田首相が3%を超える賃上げを期待するとの発言があり、その多寡について議論がわきました。時給の最低額を定めた最低賃金の伸び率は2020年を除き近年は平均3%程度で推移しています。一方で毎年の給与の伸び率を示す昇給率は2014年以降平均2%程度で推移し、20年・21年は新型コロナウイルスによる業績悪化の影響もあり平均2%を切る状況にあります。このことから、賃上げ3%は高いとも低いとも言えないというのが正直なところかと思えます。

③同一労働・同一賃金…正社員と非正規社員(パートタイマー・派遣社員など)の処遇格差の是正を目指し、働き方関連法により2020年4月より施行されました。厚生労働省が処遇の見直しに関するガイドラインを出しましたが、個別の例示になつていない等で分かりにくく、法律の施行までは各社苦慮している状況



でした。しかしながら、格差をめぐ  
る訴訟の判決が一定の条件のもとで  
の格差を否定するものではないと解  
釈できるものであったり、新型コロナ  
ウイルスにより雇用維持が優先さ  
れている状況下で、現状は対応がト  
ーンダウンしている印象があります。

④ジョブ型雇用…日本の雇用や処  
遇が終身雇用、年功序列を主として  
いるという前提の中、職務によつて  
処遇が決まるジョブ型を推進すべき  
という論調がここ数年強まっていま  
す。ジョブ型は世界水準であり、ジ  
ョブ型にすれば無駄な異動がなくな  
るため専門性が上がり、専門性を武  
器とした採用市場の活性化が起こり、  
社会全体の処遇が向上するという極  
端な論調もあります。しかし、ジョ  
ブ型の基本は職務の価値を測定した  
うえで価値に従つて値決め(給与水  
準を決める)ことにあるため、当然  
処遇が下がる人も出てくるなど、メ  
リットばかりではありません。まだ  
まだ、正確な理解が及んでおらず、  
理想や期待が先行していると思われ  
ます。

本日はコンサルティングが人事の  
トピックスについて広く浅くお話し  
させていただきました。これを機会に  
に、少しでもコンサルタントの仕事  
や人事制度に興味を持っていただけ  
れば幸いです。

## 第23回アカンサスクラブ講演録

『優れた人材の力を得て、  
中小企業を強くする』

地域経済・日本経済復興への道

宮本 修 (平成9年卒)



私は現在、小さな会社を起こして  
5年目を迎えさせていただいております。  
風が吹けば飛びそうな小さな  
会社ですが、おかげさまで根を張り、  
踏ん張れるようになって参りました。  
業務としては、中小企業への経営参  
画をしながらクライアント企業の成  
長実現に取り組んでいます。

コンサルティング会社と異なるの  
は、「徹底的に経営参画をする」とい  
う点です。外注ですが、経営と執行  
に参与します。実は、資金があれば  
顧客に資本参加をしたいぐらいです。  
これは将来の目標でもあります。今  
は労力と時間をかけて投資し、企業  
の成長と共にリターンをいただく、  
という投資家的スタンスでのビジネ  
ス関係を構築することに重きを置い  
ています。

事業のコアは3つです。「経営者の

考えを自分のものとする」「経営課題  
を明確にし、活動を企画立案、実行  
する」「経営資源を活かし、全力で取  
り組む」の3つです。つまり、「中小  
企業経営者の右腕」が事業内容です。

この仕事をするためには、一定の  
マインド、スキル、ノウハウが必要  
です。それは、社会人経験の中で習  
得してきました。一高卒業後、慶應  
義塾大学経済学部を経た後、旧UF  
J銀行に第1期生として入行しまし  
た。短期間でしたが、この時の経験  
により財務諸表、資金調達、金融リ  
テラシーについて知見を深めること  
ができたことがその後ずっと役立つ  
ています。事実、クライアントにて  
金融機関との交渉にも参画していま  
す。

その後、株式会社ブリヂストンの  
京橋本社にて15年ほどお世話になり  
ました。海外営業、貿易実務、商品  
企画、事業投資管理、グローバル事  
業企画、労組役員などを経験し、現  
在の基盤を得ました。顧客の事業成  
長を実現する上で求められるマイン  
ド、スキル、ノウハウはここに集約  
されるものです。

講演会では、自社が取り組んでき  
た事例として、2つを挙げさせてい  
ただきました。①国内専業だったメ  
ーカーにて輸出事業を立ち上げ、コ  
ロナ禍に5カ国への輸出拡大を図つ  
たこと(さらに増加中)、②小売業に  
おいてSNSを活用した営業活動や  
リモートワーク環境整備に取り組み、

コロナ禍でも増収増益を達成したこ  
と、の2点です。

ここで申し上げたいのは、いずれ  
もクライアント企業に競争力のタネ、  
光るビジネスモデルが存在し、それ  
が開花しているという点です。つま  
り、成長の原点は必ずその企業の中  
にあるということです。そして、大  
切なことはそれを引き出すには人材  
が必要だということです。恐れずに  
言いますが、「優れた人材」、私のよ  
うにクライアントの事業成長を実現  
できる人材を増やすことが必要だと  
考えるようになりました。

中小企業に関与しながら思うこと  
は、全ての中小企業に成長の可能性  
があるのですが、「それが実現できな  
い」というところが課題です。その  
背景には主に3つの課題があること  
と考えるようになりました。

①経営課題が不明確(課題設定力)  
②経営課題に取り組めない(実行力)  
③経営者の学びが足りない(経営者  
のあり方Ⅱ事業力)

この3つの課題を自律的・持続的に  
解決する仕組みをビルトインするこ  
とを、社会的に価値ある事業として  
取り組むべき、と考えている次第で  
す。

そして、経営を支える「優れた人  
材」、事業経営全般において関与でき  
る人間を中小企業に投入していく必  
要があります。優れた能力と経験を  
有している大企業にお勤めの方々、  
専門職者などから、有志・有能な人

を求めていくことが重要だと考えています。副業、複業、独立など様々なスタイルでの関与の仕方ができる時代なので、これが可能であると考えています。そして今、この取り組みをスタートし、有能な人の力を積極的に導入することにチャレンジを開始しています。

私は、地域社会を支える中小企業の存在価値を引き出すこと、それを持続する仕組みを作ること、事業の根幹に据えることで、自らの事業を通じて豊かな社会作りに貢献していきたいと思っています。この度は、自分の考えを整理する機会、そして、多くの方と共有できる貴重な機会をいただきました。誠にありがとうございます。心より感謝を申し上げます。

もし私の活動について興味関心をお持ちいただけの方がいらつしやいましたら、お気軽にお声かけ下さいませ。いつでもどこでも、まずはオンラインにて、夢のある楽しいお話ができればと思います。

#### アカンサスクラブからのお知らせ

3月、9月、12月の第1木曜日  
午後6時半から、現在はオンライン  
でミニ講演会を行っています。

次回は 9月1日です。皆様の  
ご参加をお待ちしています。

## 令和4年度 通常総会はオンライン会議で開催

今年度も昨年度に引き続きオンラインにて通常総会を開催します。

日時： 6月12日(日) 午後1時半から3時(予定)

内容： 来賓挨拶 中澤齊 土浦第一高校・附属中学校校長

大野金一 進修同窓会会長

総会審議 決算報告・予算承認、役員改選

演奏 土浦一高吹奏楽部(収録映像にて)

演舞 土浦一高応援指導部(収録映像にて)

講演 『中高一貫政策と現状及び部活動の報告』

中澤齊 土浦第一高校・附属中学校校長(昭和56年卒)

審議事項につきましては、同封の資料(予算決算および役員改選)をご確認いただき、オンライン会議への参加、または書面表決手続きによる決議のどちらかを選択して、返信用封筒にて6月5日までにご回答下さい。また、今年度の東進会年会費3,000円につきましても、随時受け付け中ですができれば、6月末日までに、同封の振込用紙にてお振込み下さい。今後の東進会活動を維持していくためにも、引き続き年会費納入にご理解下さいますようお願い申し上げます。

#### 編集後記

新型コロナウイルスの感染が収束しないまま、丸2年が過ぎてしまいました。その間、家族や友人、知人に会うことができず、もちろん会食もできないので、人間関係が難しい世の中になってしまいました。我々人間は対面で、お互いに顔を見ながら(マスクで半分以上覆われた顔ではなく)生の声を聴いて相手と話をしながら、生活していく動物のようです。

そんな中で、アフガニスタンでのタリバン政権復権、ロシアのウクライナ侵攻等、一般の人々を巻き込む事件が勃発しています。何の罪もない人々が死傷している現実を見ると、人間の愚かさを感じざるをえません。アフガニスタンから逃れてきた子女に会う機会がありました。そのつづらな瞳に魅せられ、自分の生まれた国で幸せに暮らせる平和な世界へ、早く戻ってほしいと願うばかりです。

今年も東進会総会はオンラインで行います。オンラインはちょっとした敷居が高いという声を聞きますが、参加してみれば意外と簡単です。どうぞ挑戦してみてください。一人でも多くの皆様にお会いできるのを楽しみにしております。